特集 地域再生に向けたエコ・アプローチ

地域・地方の疲弊を克服し、活性化への道を見出すヒントを「環境」という切り口から探る

寄稿

# 地域再生の試み ～ヨーロッパと日本

間宮　陽介
（京都大学大学院人間・環境学研究科教授）

## 市場の均質化作用

グローバル化の流れの中で、地域が衰退しているのは日本もヨーロッパも同じである。市場の力は、地域や地方がもっていた個性や活力を、いわばローラーがでこぼこした大地を押し均していくように、均質化していく。

市場がこのような均質化作用をもつことと、市場が、地方と中央、農村と都市の格差を拡大させていることとはなんら矛盾しない。経済が好景気に沸いているときには資金は市場原理によって地方の隅々にまで浸透していくが、不景気になると、同じ市場原理にもとづいて、資金は地方から経済の中心地に環流し、地方経済は資金逆流のあおりをまともに受ける。20世紀前半の不況期に考案された地域通貨は、資金の逆流に対抗する1つの試み、いわば地域再生の最初の試みであった。市場の均質化作用とは貨幣のもつ均質化作用（資本に故郷はない、というマルクスの言葉を想起されたい）にほかならず、グローバル化の時代には資金は瞬時に国境を越える、独自の産業や文化を築きあげてきた地方・地域を素通りして、国家間を移動する。

筆者はこの5年、2度にわたって、ヨーロッパの地域再生の現状を調査する機会をもった。1度目はスペイン、次がイタリアである。ここではまずスペインの2つの事例（ポブラとビルバオ）を調査ノートから抜き出して、再掲しておくことにしよう。

## 調査ノートから――ポブラ

ポブラ町長C.ロセル氏からの聞き取り。

ポブラはカタルーニャの1寒村。人口は1400人、平均年齢55歳。子供の数は少なく、現在小学校に通っている者は60人足らず。中学校はなく、小学校を終えた者は隣町の中学校に通う。かつては紡績工場とセメント工場をもち、比較的豊かな町であったが、紡績工場はすでに閉鎖され、セメント工場も本年［2005年］3月中に閉鎖の予定。このようにポブラは衰退の危機に瀕しており、いかにして町を再生させるかが大きな課題になっている。このようななか、ポブラはEU都市再生プログラムの対象となり、EU基金に加え、民間と公的両者の支援により再生を図ろうとしている。

ポブラの居酒屋にて。好みのワインを樽から出してくれる。中央が筆者

だが、前途は多難である。若い人たちは義務教育を終えると町を出、工場誘致もはかばかしくない。若者にとって魅力的な町にするにはどうすればいいか、高齢者の福祉をどうするか。

問題は山積しているが、女性町長にも、あるいはこの町全体にも悲壮感はない。日本では小都市の合併が進んでいるが、と問うと、「『自分たちの町』ではそのようなことは考えられない」と町長は話す。自分たちが生まれ育った町に愛着と誇りを持ち、それが都市再生のバネとなっている。

だが、ポブラは決して孤立しているわけではない。医療、学校、防災などのサービスに関しては他の町と広域のネットワークを作り、相互に連携しあっている。グローバル化の波はこの小さな町をも容赦なく襲っているが、浮き足立つことのないその姿勢には学ぶところが多い。

**調査ノートから――ビルバオ**

ビルバオ市第一助役I. アレン氏（アレン氏は元ビルバオ総合開発責任者、自らは建築家でもある）のレクチャー。

ビルバオは1300年に創設された中世の都市。19世紀の半ばに鉄鉱鉱山が開発され、鉄鋼業を中心とした町として発展。だが1970年代に入るとアジア新興工業国が台頭し、ビルバオ市は基幹産業の衰退という事態に直面する。このようななかで、市をいかにして再生させるかという大きな課題を担って陣頭指揮に当たったのがアレン氏である。以下は氏のレクチャーの骨子である。

1）ビルバオ市の歴史。ビルバオ市は1300年6月15に創設され、1511年のビルバオコンソレート（海運商工会議所）の設立を機に商業都市として発展。1850年頃、鉄鉱鉱山が開発され、当初はイギリスへの輸出で利益を上げたが、やがて豊富な鉄鉱石をもとに、製鉄所が創られ、ビルバオも産業革命を迎える。鉄鋼業だけでなく造船業も盛んになり、工業都市として大いに発展。だがオイルショックの影響はビルバオにも及び、1970年代には失業率が35パーセントにもなる。産業が衰退すると同時に、都市環境も悪化し、麻薬の横行によって治安の悪化も無視できないものとなった。「何とかしなければ！」ビルバオは崩壊するという危機感によって、ビルバオ市の再生事業が開始された。

2）産業再生と環境整備。ビルバオは何よりもまず、失業者のために雇用を創設することに意を用いた。従来の工業は雇用効果はそれほど大きくない。ビルバオが目指したのは産業構造の転換――工業都市からポスト工業都市への転換であった。具体的にいうと、①インフラ整備。空港、港湾、地下鉄、それにインターネット網の整備、②環境整備、街並み整備、③教育の充実、④文化活動の推進と文化の発信。

3）プロセス。都市を作り替えるために、工場跡地を市が買い取り、敷地を公共用地とした。都市開発の主体は公社であり、出資比率は中央政府とバスク政府がそれぞれ50パーセント。官と民のあいだの調整は容易だが官－官の調整は容易ではない、というのはアレン氏の言。

文化都市建設の目玉となったのがグッゲンハイム美術館の誘致建設である。他の諸都市が同美術館の誘致に二の足を踏むなか、ビルバオは誘致を断行。日本円換算で186億2000万円のうち119億円を建設費（周辺整備を含む）に、50億円をコレクションの収集に充てる。

グッゲンハイム美術館

4）効果。美術館の費用回収のためには年40万人の入場者が必要、だが初年度の入場者は135万人、現在でも90～100万人の入場者がある。GDP効果は初年度が20億6000万円、3年間の税収増は119億円、美術館建設による雇用の増加は3816人。

アレン氏はもっぱら産業再生の観点からビルバオの施策を説明した。では「文化都市」の創

設はうまくいったかといえば、必ずしもそうではない、というのが市内を見学したときの印象である。「文化」が市民の生活から浮いてしまって、グッゲンハイム美術館の周辺は市民の憩いの場というよりは、観光名所という観を呈している。町全体が何かだだっ広いという感じで、凝集感に欠ける。開発区域よりは、商店が密集する旧市街に都市らしい魅力を感じたのは私だけだろうか。

**ポブラ型とビルバオ型、そしてイタリアは？**

ポブラとビルバオは都市（町）の規模の点では大きな違いがあるが、グローバル化の進展とともに産業基盤を喪失していったという点では同じである。産業基盤の喪失という事態に直面して、ポブラはEU基金の補助を仰ぎながら、生活基盤の再生・強化に主眼点を置いている。これに対し、ビルバオは工業都市からポスト工業都市への転換を図ろうとしている。広い意味での産業再生である。その目玉がグッゲンハイム美術館であり、文化都市へと転換することによって市外からの集客に力を注いでいる。もっといえば、前者は日常生活の再生・強化に活路を見出そうとするのに対し、後者は都市を非日常の空間とすることにより、都市の再生を図ろうとしている、ということである。

筆者が2度目の調査を行ったイタリア北部のトスカーナ地方はポブラ型に近い。ただポブラと違うのはトスカーナ地方の農村地帯にはワイン、ハム、チーズ、オリーブ油といった伝統的な地場産業が存在していることである。それだけ、この地方はポブラよりは有利な位置にあるといえる。しかしグローバル化の波をまともに受けているのはトスカーナ地方も同じである。ジョコンダ夫人（モナリザのモデルになったあのジョコンダ夫人！　小さな事務所の壁にはモナリザの写真が掛けられていた）の末裔が経営するワイナリーは広大な葡萄園をもつ家族経営のワイナリーであり、そのワインの品質は、何度も賞を取ったことからもわかるように、折り紙付きであるが、その主人によれば、近年では中国産の安いワインに押され気味だという。

イタリアはスローフードとグリーンツーリズムの調査が主目的であった。日本では商業主義の臭いがするこの地域振興策は、彼の地ではまったく様相を異にしていた。トスカーナの丘陵地帯を見下ろす山上の栗林――樹齢300年の栗の木は想像を絶する大きさで、トスカーナ栗は日本にも輸出され、洋菓子の材料として使われている――は、夫婦と息子の3人で管理され、下草1本生えていない林は山上の公園といった趣だ。ツーリストが泊まる小部屋が2部屋あり、壁には日本の浮世絵が掛けられていた。付近のなだらかな傾斜面に2人の中年婦人が長椅子に寝そべっていた。デンマークから来たという。何をするでもなく、1週間ほど、こうしてのんびり過ごすらしい。帰路、キャンティクラシコの小さな町――ポブラよりずっと小さい――に立ち寄った。小さな広場に面してファニーロという名の店がある。製造するハムやサラミは品質と味が評判で、域外からも多くの客を集めている。

欧州農村整備現地研究会（生源寺眞一団長）がトスカーナの栗農家を訪れたさいの記念写真。後列、左から２人目が筆者

「ファニーロ」の店内。チンタ豚のハムとサラミで有名

イタリアは筋金入りの個人主義の国だという。このような国にグローバル化の均質化する波が押し寄せるのだから、その葛藤や軋轢は相当のものであったに違いない。彼らが選んだ道は大勢に順応するよりは、自分たちが代々受け継いだ資産を点検し、それを頑固に守り通していくことであった、といえるかもしれない。トスカーナ地方の農業だけではない、ローマやフィレンツェには古代ローマの城壁や中世の建物が数多く残っているが、彼らはそれらをいまでも活用し、時にはホテルその他の現代の建造物に組み込み、再利用している。スローフードやグリーンツーリズムも地に足がついているのを実感した。

**日本の地域再生**

日本とヨーロッパとでは歴史、文化、地勢、それに経済的背景も違う。また同じ日本、同じヨーロッパでも地域差があることは承知している。筆者のわずかな知見をもって一般化する弊は避けなければならないが、敢えていうとしたら、日本の地域再生は、中小都市のそれも農村山間部のそれも、それらはどちらかといえばビルバオ型に近いのではなかろうか。

たとえば滋賀県長浜市の町おこしもそうである。長浜市（と京都市）は、一昨年、われわれの研究科（京都大学人間・環境学研究科）と町づくり協定を結び、町おこしの実践を協力して行うとともに、教員や学生たちは当地を研究の場とし、いくつかのプロジェクトを組んで研究活動を行っている。理論的・実践的な活動拠点が研究科の長浜研究所で、市はわれわれのために江戸時代の商家を改築してくれた。

もちろん長浜はビルバオそのものではない。長浜だけがもつ資産、たとえば古くから伝わる黒壁、小堀遠州の庭園、曳山祭りなど、有形無形の諸資産を巧みに利用しながら都市再生を行っている。こうして、多くの地方都市の中心地区がシャッター街と化すなかで、長浜の中心市街地は見事に再生を遂げ、いまでは最も成功した地域振興の一つに数えられている。JR長浜駅から歩いて10分の距離にある中心市街地は多くの観光客で賑わい、そのまた中心の「黒壁スクウェア」は活気と輝きを帯びている。

長浜の中心市街地にある黒壁スクウェアの街並み／中井直樹撮影

だが、市の職員も懸念しているように、中心市街地と周辺の生活空間とが切り離されている。日常空間と非日常の空間が分離していて、両者の交わりが希薄なのである。黒壁地区で目にするのは多くが観光客、昼間はにぎやかだが、夜は人の姿もまばらである。ちょうど霞ヶ関の官庁街がそうであるように。昼のにぎわいをどのようにすれば夜に持続させることができるか、あるいは1年中を通して持続させることができるか。さらにまた、観光客の足が遠のいたとき、潮が引くように町が衰退していくのを、どのようにすれば食い止めることができるか。

日常の生活が営まれている空間にせよ、観光客の集まる非日常の空間にせよ、空間を持続させるのは人々の多様な活動である。この活動は非日常空間では「イベント」を生み出す力となり、日常空間では生活そのものを生み出す力となる。京都市民の台所である錦市場は日常空間と非日常空間が融合した見事な例、市民の生活が観光の対象となる希有の例である。地域振興・地域再生は意外に身近なところにある、遠くを見る前に、まず足下を見つめよ。これが筆者の乏しい経験から導き出された1つの結論である。